

麥蒔た顔つきもせず二百人  
石原に根強き冬の野菊哉  
冬枯の草の家つゝく鳥哉  
薄とも蘆ともつかず枯にけり  
凧に尻をむけけりはなれ鴛  
小石にも魚にもならず海鼠哉  
鮭さげて女のはしる師走哉  
焼芋をくひく千鳥きく夜哉  
千鳥啼く揚荷のあとの月夜哉  
千鳥啼く三保の松原風白し  
海原に星のふる夜やむら千鳥  
いそがしく鳴門を渡る千鳥哉  
一村は皆船頭や磯千鳥  
帆柱や二つにわかれてむら千鳥

(曉の句に風早し二)  
つにわかれてむら千鳥

安房へ行き相模へ歸り小夜千鳥  
磯濱や犬追ひ立てるむら千鳥  
文覺をとりまいて鳴く千鳥哉  
こさふくや沖は鯨の汐曇り  
生残る蛙あはれや枯蓮  
凧にしつかりふさぐ蠅の蓋  
旅籠屋や山見る窗の釣干菜  
冬椿猪首に咲くぞ面白き  
冬枯やいよく松の高うなる  
冬枯に枯葉も見えぬ小笹哉  
天地の氣かすかに通ふ寒の梅  
おろくと一夜に瘦せる暖鳥  
ぬくくと日向かへて難つるむ  
明の月白ふの鷹のふみ崩す

冬枯のうしろに高し不二の山  
立つや

松枝町

四五枚の木葉掃き出す廓哉  
東野の紅葉ちりこむ藁火哉

松山堀ノ内

鳥や聞耳立つる三千騎  
鯁釣や沖はあやしき雪模様  
鷺谷に一本淋し枯尾花

松山

寒梅や的場あたりは田舎めく  
枯れてから何千年ぞ扶桑木  
吹き入れし石燈籠の落葉哉  
逃げる氣もつかでとらるゝ海鼠哉

ほろくと朝霜もゆる落葉哉  
いさり火の消えて音ありむら千鳥

小年不及大年

年九十河豚を知らずと申けり  
引きあげて一村くもる鯨哉

祝

としくに根も枯れはてす寒の菊  
わろひれす鷹のすわりし嵐哉  
繪のやうな紅葉ちるなり霜の上  
白鷺の泥にふみこむもみち哉  
もみち葉のちる時悲し鹿の聲  
谷窪に落ち重なれるもみち哉  
居風呂に紅葉はねこむ覓哉  
はきよせた箒に残るもみち哉

二三枚もみち汲み出す釣瓶哉  
 一つかみづゝ爐にくべるもみち哉  
 舟流すあとに押しよるもみち哉  
 石段や一つくゝに散もみち  
 日光  
 神橋は人も通らす散紅葉  
 藁屋根にくさりついたる艳哉  
 豆腐屋の豆腐の水にもみち哉  
 衣洗ふ脛にひつゝくもみち哉  
 裏表きらりくゝとちる紅葉  
 鳥や杉見あぐれば十日月

明治二十六年癸巳

新 春

紀元二千五百五十三年の春  
 十萬の常備軍あり國の春  
 宮城や文武をかぬる君か春  
 某 亭  
 つくばねは筆のさきなり庵の春  
 ほのくゝや軒忽ち絶えて春  
 今朝の春有明月を見つけたり  
 一休は死んでめでたしけさの春  
 今年巳年なれば  
 唾壺に龍はかくれてけさの春

かばかりのものとしらじをけさの春  
餅花の小判動かす國の春  
僧赤く神主白し國の春  
狼は山へ歸るや御代の春  
民の春同胞三千九百萬  
けさの春琵琶湖縁に不二白し  
母人は江戸はじめの春日哉  
寒き日を御製にたよる民の春  
鶯根岸や東よりくる庵の春

元日

元日に海老の死骸のおもしろや  
元日やとても事の事に死で見ん

禰宜だちよ元日のいはれ物語れ

立春 我王の二月に春の立ちにけり

松の内 口紅や四十の顔も松の内

子の日 我庵は門松引て子の日せん  
子の日せん小松の中の小松哉  
ほろくと袴きれたり小松曳  
我戀は引く手なぎさの小松哉

春日野や子の日も過ぎて鶴の聲

初日 ゆらくと柳うごくや初日影

初日さす硯の海に波もなし

御降

御降りの流れいでけり御所の溝  
御降りの雪にならぬも面白き

嫁が君

肴には數の子よけん嫁が君  
行燈の油なめけり嫁が君  
餅殿を戀に夜毎の嫁が君

福壽草

水仙の冬にならんで福壽草

惠方

鶯の惠方を向て鳴にけり

飾

奥山や人こぬ家の門かざり

輪飾に鶯ゆれる根岸哉  
輪飾を茅の輪にくゞる鶯か

橙

橙や都の家數四十萬  
橙や裏白がくれなつかしき

樸

ゆつり葉や齒朶や都は山くさし

齒

裏白のひんとはねたる姿哉  
裏白のある夜伊勢海老に語つて曰く

削

甚五郎は何と削るぞ削り掛

若

若水や天廣うして星の數

蓬菜

動きなき蓬菜山の姿哉  
蓬菜や山のものより海の物  
蓬菜の上にしだるゝ柳哉  
蓬菜に我身ちよめてはひらうよ

初曆

君か代や二十六度の初曆

年玉

年玉や長崎錫蝦夷昆布  
年玉や何ともしれぬ紙包み

寶引

寶引やあとにもものうき包み紙

門禮

門禮や草の庵にも鄰あり

錦始

天は晴れ地は濕ふや鍛始  
象も來つ雀も下りつ鍛始

初夢

初夢や松の柱に芽がふいて  
うれしさに初夢いうてしまひけり

調初

盆栽に松あり梅あり謠初

雙六

雙六や盧生の夢のふりあがり

鞠子

子を負て子守鞠つく片手業

遣羽子

人ごみの中に羽子つくをとめ哉  
遣羽子や根岸の奥の明地面

養父入

藪入や縁きる話よもすから  
藪入や思ひは同じ姉妹  
藪入の二人落ちあふ渡し哉  
藪入の足跡多し畔の雪

猿曳

鞭あげて入日招くや猿まはし  
うつくしき妹をもてり猿まはし

鳥追

鶯がのぞく鳥追の笠の中

懸想文賣

鶯の音もなし梅の懸想文

萬歳

萬歳や黒き手を出し足を出し  
萬歳の家にめでたし古鼓

傀儡師

萬歳と相のりしたる渡し哉  
無造作に萬歳樂の鼓哉  
其箱のうちのぞかせよ傀儡師  
辨慶に吠つく犬や傀儡師

はじめの冬

寒

梅檀の實ばかりになる寒さ哉

夢中人を送りて

から尻のうしろは寒き姿かな

火

桶

俊成のなでへらしけり桐火桶

炭

炭賣の歸りは輕し二貫文

奥山の木の葉もまじる粉炭哉

水仙にはたきかけたる粉炭かな

一冬や簀の子の下の炭俵

埋

火

埋火の夢やはかなき事ばかり

紙

衣

俳諧のはらわた見せる紙衣かな

千早ふる紙衣久しき命かな

傾城の泪にやれし紙衣かな

頭

巾

氣安さは頭巾を老の渾名にて

茶の花をかざさばいかに丸頭巾

雪

車

雪車引て笹原歸る月夜かな

緋

あかじりやまだ新嫁のきのふけふ

納

豆

やうくに納豆くさし寺若衆



寒 鴨 海 鮎

月 鼠

傾城の噂を語れ納豆汁

鮎汁やきのふは何の薬喰

世の中をかしくくらす海鼠哉

瓦とも石とも扱は海鼠とも

老子 渾沌をかりに名づけて海鼠かな

鴨のなく雜木の中の小池哉

日あたりの入江にたまる小鴨哉

つるされて尾のなき鴨の尻淋し

寒月や立枯の芭蕉ものくし

霰 吳 氷

寒月や何やら通る風の音  
寒月や山を出る時猶寒し

恐ろしき鴉の嘴や厚氷

みぞるゝや更けて冬田の薄明り

竹垣の外へころげる霰かな

燈心のたばにこぼさぬ霰かな

陣笠のそりや狂はん玉霰

根岸 吳竹の名に音たてゝ霰哉

ある文のあとに

藻汐草かきあつめたる霰哉

杉の雪一町奥に仁王門  
 雪の門叩けば酒の匂ひけり  
 白雪の筆捨山に墨つけん  
 雪の野にところくの藁屋哉  
 雪の跡木履草鞋の別れかな  
 不忍池  
 嶋の雪辨天堂の破風赤し

日頃鳥の來て庵の屋根こつくとつよくに此雪ふりて  
 よりたえて其音を聞かれば

屋根の雪鳥の嘴のみじかさよ  
 灯ちらぐ木の間に雪の家一つ  
 火やほしき漁村の雪に鳴く千鳥  
 松の雪はたりくとをしい事

竹折れて雪は鄰へこほしけり  
 馬の尻雪吹きつけてあはれなり  
 首入れて巨燧に雪を聞く夜哉  
 有明に雪つむ四條五條かな  
 裏窗の雪に顔出す女かな  
 ちろくと夕餉たく火や苦の雪  
 面白や家はやかかれて雪の旅  
 面白やかさなりあうて雪の傘

新 湯

青みけり八千八水雪の中  
 わびしさや圍爐裏に煮える櫓の雪

根岸草庵(三句)

我庵のものぞ上野の杉の雪  
 我茶や上野をかざす雪明り

吹雪

縁側になくや吹雪のむら雀  
あら鷹の眼血ばしる吹雪かな  
通天の橋裏白き吹雪かな

雪佛

雪佛眼二つは黒かりし  
はしためが水かけてけり雪佛  
雪佛われからにらみ崩れけり

春

長閑

のとかさや海士と木こりの物語り

大詔下る

鶴の聲これより空の長閑なり

武蔵野

野開きて夕日のどかに八百里

うらゝかや女つれだつ嵯峨御室

病起

うらゝかや見つめる空も病み上り

暖

朝日より猶あたゝかき入日かな  
あたゝかに白壁ならぶ入江哉

餘寒

雛鶴のうぶ毛吹かるゝ餘寒哉  
一枚の紙衣久しき餘寒哉  
二三文財布の底の餘寒哉  
病人の巨燧消えたる餘寒哉

春湖追善

水洩の泪にまじる餘寒かな

松字亭に桃雨猿男と會して

四人の丸くなつたる餘寒かな

冴返

冴返るけふにはありけり何年忌  
蒟蒻の水さえ返る濁りかな

二法學士遊く

野邊送りきのふもけふも冴え返る

病中送人

君行かばわれとゞまらば冴返る

紀元節

人の世になりても久し紀元節

彼岸

山門に鼠のはしる彼岸哉  
韓愈推し賈嶋は敲く彼岸哉

母の詞自ら句になりて

毎年よ彼岸の入に寒いのは

初午

初午や土手は行來の馬の糞  
初午や薄はいまだ芽に出でず

涅槃會

初午や枕にひびく大太鼓  
初午や禰宜と坊主の従弟とし  
初午や半日程は田舎道

西行忌

天竺や花ちる二月十五日  
春三月中にあはれな涅槃像  
涅槃像見かけて鳴くや山鶉  
涅槃像鼠の尿もあはれなり  
大寺の本堂すごし涅槃像

釋奠

其杖のそのまゝ花と生ひけらし  
謠一曲亡魂花にうかれ出よ  
釋奠や流れてやまぬ御茶の水

御身拭

水仙も黄をさく頃や御身拭

梅若忌

この花に泣き上戸あり十五日  
花の中に柳一木のあはれなり

籍踏

苗代の泥足はこぶ籍踏哉

出代

出代の別れかねたる小犬哉  
出代や養子になりし丁稚あり

巻藁を解

巻藁のとれて蘇鐵のそよぎ哉

火燧塞

巨燧なき蒲團や足ののべ心

峰入

峰入やもの書きつける袖の裏

二日灸

落ちぶれし平家の末や二日灸  
十郎や五郎も共に二日灸  
婆々様の顔をしぞ思ふ二日灸

水口祭

蛙皆うたふ水口まつり哉

種蒔

留別(二句)

種蒔の花に咲く頃歸り來ん  
道々や種まく人にいとま乞

上り築

魚肥たり七十二灘上り築

朝鷹

朝鷹の眼に有明のうつり哉

泊り山

泊り山夢見る雉の聲すなり

風

され風の川渡り行く嵐哉  
され風や絲くひとむる鬼瓦  
人もなし野中の杭の風  
羽衣を誰にとられてかゝり風  
そこらから江戸が見えるか奴風  
列子  
風に乗る姿は輕し風巾

摘草

摘草や京の女の數々は

摘草や三寸程の天王寺

一枝の桃の木陰の雛哉  
朝見れば笑ひこけたる雛哉  
ことく誰やらに似る雛哉  
紙雛や戀したさうな顔ばかり  
雛の日や誰と遊ばん白拍子  
雛のふり更に肥たるはなかりけり  
雛祭二日の宵ぞたのもしき  
雛も出てしばし浮世のほこり哉  
人は寐て雛がはやしの太鼓哉  
思ひ出に雛と遊ばんよもすがら  
めでたしや娘ばかりの雛の宿  
初花の匂ひこぼれつ雛の袖

時代にもつれず雛の姿かな  
きぬくや來年契る雛の顔  
夜の雛を鬼一口の鼠かな

曲水やよどみに迷ふ小盃  
永き日をあら曲水の面白や  
菱餅の色々になる雛心

旅人や馬から落す草の餅  
草餅のこゝは灸の名所哉

桃酒や大事のく小盃

茶摘

茶摘歌東寺の塔は霞みけり  
顔見ねば戀にぞ似たる茶摘歌  
うら若き聲のみ多き茶摘哉  
我庭に歌なき妹の茶摘哉

彌生

奥山にひとり香炷く彌生かな  
病而不眠  
寐られぬを戀ときかれん彌生哉

八十八夜

春人

出流れの番茶も八十八夜かな  
春の人松の葉ごしにちらくと

春日

はりものゝもみ衣匂ふ春日哉  
春の日を一日眠る小猫かな  
春の日を奥山人と語りける  
十四五羽雞のつれだつ春日哉  
春の日を鼓の紐のゆるみけり  
昔の木に雀囀る春日哉  
鎌倉  
大佛のうつらくと春日哉

遅日

遅き日や聾の僧の物語り  
旅籠屋に夕餉待つ間の暮遅し  
霞んだり曇つたり日の永さ哉  
屑買の嫁御になるゝ日永哉

日永



鉛賣の辨慶のびる日永哉

春 夕

灯ちらく洛陽の春の夕哉

飛鳥春照 東都八春詞の一

うつくしき春の夕や人ちらはら

春 夜

春の夜や灯にそむきたる瘦女

春の夜や何の夢見て蝶一つ

春の夜やくらがり走る小提灯

春の夜や女見返る柳橋

春の夜の三千賀の鹽松がま原烟たつ

春の夜の佛壇見ゆる燈哉

春の夜に火のなき火桶抱へけり

春の夜を鎌倉山のはなし哉

(春風や烟横たふ  
三保の松 虚子)

臙 夜

臙夜やまぼろし通ふ衣紋坂

臙より臙に人の話かな

臙夜や潮來をうたふ舟の中

行 春

行く春や尺に満ちたる蔀の臺

行く春や苜に届きし藤の花

行く春や商人船の立烏帽子

行く春や目を患ひし京の人

行く春をうれしさうなる鴉かな

行く春のもたれ心や床柱

掃溜の蛤殻や春の行く

鶯の松にとまりて春ぞ行く  
春行くやある夜鳴神稻光り  
草の戸に春の行方の哀れなり  
春くれてみだれそめにし心かな  
この春も維摩の像にくれてけり  
草の戸や春ををしみに人のくる  
馬は皆よしのをあとに春のくれ  
松杉の不破の關屋に春くれぬ

題美人圖

松字氏の徙移に

行く春をものいひたげな姿かな  
この春を王子のかたへ追て行け  
角田川  
行く春の釣針にかゝる魚もなし

三月盡

行く春の雨になりけり反故買  
行く春や胡弓の絲をはづす瞽女  
不盡のねに三月盡の青さ哉  
櫻日記三月盡と書き納む  
けふになりて頻りに春の惜くなる

春雜

うとくと春の寐心夢もなし  
さけば咲く櫻海棠梨李  
面白さ皆夢にせん宵の春  
じだらくに寐たる官女や宵の春

楊貴妃畫讚

春深し眠る海棠醒る梨  
上萬畫讚

春風

得ならぬは春の錦の匂ひ哉

春風や白帆にまじる蜺舟  
春風や根岸の寮に女客  
春風や牛賣りありく京の町  
春風や三味線堀のさゝら波  
春風や人の波うつ淡路町  
春風や女つみ出す越後船  
春風や女酒賣る船の中  
春風や蟹つる女年二八  
春風や皆似た顔の官女達  
春風や淀川下る琵琶法師  
春風や紅の干衣ひらくと

春風や海は海苔取鮑取  
春風の吹くにつけても草の庵  
春風や干潟にのこる三味の舟  
春風や吹かれくつて三百里

品川春風 東都八春詞ノ一

盧子唐突に京より来りければ

由井演

春風や起きも直らぬ磯馴松

某氏にいざなはれて鎌倉を見る其人山の名なんと委しく語りけるに

歌にせん何山彼山春の風

幽霊園

春風や何の夢見る朽柳  
春風や伊勢をの海士のさばき髪

風光る

文金の合せ鏡や風ひかる

貝寄風

貝よせや磯は花貝さくら貝

霞

朝鮮をうしろにかすむ對馬哉  
武藏野の一隅かすむ筑波哉  
與謝の海かすんで赤き入日哉  
野の宮のあはれをこゝに霞みけり  
飛び込んで鳥も霞みけり  
牛馬の遊ぶ野廣し春霞  
一村は柳ばかりや朝霞  
網干さぬ蟹が家はなし夕霞  
真帆片帆行手々々の海霞む  
霞みけり山消えうせて塔一つ

霞む山根本中堂中にして  
霞む日や八嶋は遠き海の上  
宇治下る柴つみ船や夕霞

鎌倉

大佛は前とうしろの霞哉

十國峠

十國の一つくに霞みけり

福嶋某西比利亞旅行の圖

日本の霞目がけていそぐらん

夢想

蓑の毛は晴れて漁村の霞哉

鐘霞む

帆の向のかはるや須磨の鐘霞む

春 雪

下町は雨になりけり春の雪  
狩衣やはらひもあへす春の雪

淡 雪

淡雪のうしろ明るき月夜哉

残 雪

朝見れば雪も残らず宵の雨

雪 解

庭先に槌の出てくる雪解哉  
はしためのかもじ干たる雪解哉  
雪解や日和うれしき軒雪  
雪解けて魚の腸あらはるゝ

雪なたれ

雪なだれ箱庭の人家つぶれたり

初 虹

うすくと初虹うつる外山哉

初 雷

初雷や荷馬ひきこむ遊行寺  
初雷や仁王の陰の悪太郎

陽 炎

陽炎や梅ちりかゝる石の上  
陽炎や枯野の時の馬の糞  
陽炎や野寺の墓の一つづゝ  
陽炎や大砲けふる那須野原  
陽炎や小雨のあとの南風  
陽炎や此頃でさし小石道  
陽炎や簀子日のもる辻談義  
陽炎に牛の涎のかゝりけり  
陽炎に狂ふ牡猫の眼ざし哉

西新井

陽炎の野中に立つや大師堂

鎌倉某氏別墅

陽炎や小松の中の古すゝき

鎌倉建長寺

陽炎となるやへり行く古柱

陽炎や鼻血のにじむ紙の屑

永き日や鄰の屋根を窗の影

陽炎や桶をはなれて桶の上

陽炎や何やら芽さす雨上り

陽炎を打ち消す磯の男波哉

兀山や陽炎のたつ思ひあり

炭竈に陽炎立つや晝下り

春 雨

琵琶抱て千手泣く夜や春の雨

女一人ふええ二人ふええ春の雨

春雨や文ひろげの狂女我を見る

春雨や女乞食の琴の音

春雨や傘を提げ行く女あり

春雨に<sub>二</sub>聲の寐さまを見つけたり

春雨にぬれて野牛の眠り哉

浅草観音

春雨やお堂の中は鳩だらけ

病中

羨見ても旅したくなる春の雨

雨居

夢に見ん遊女もしらず春の雨

朧月

朧月四條をわたる小唄かな  
 朧月耳なし山を見に行かん  
 辨慶の足音高し朧月  
 蟹の泡流れて白し朧月  
 御所を出る小溝の音や朧月  
 ならぶ火は隣の國よ朧月  
 家焼けたあとの匂ひや朧月  
 大名のしのびありきや朧月  
 馬ひとり歸る小道や朧月  
 居酒屋の喧嘩押し出す朧月  
 芳原春月 東都八春詞の一  
 月 朧 窗 あり く と 影法師  
 羽衣の裾かけて月や朧なる

春月

聲がねに誰がなるらん春の月  
 春の月御格子あげて人もなし

春湖追善

春の月なき名とさへもあはれなり  
 紗の窗や宮女琴ひく春の月  
 陽炎ののぼる待つ間の別れ霜  
 塗椀の流れよりけり春の海  
 春 春 別  
 水 海 霜  
 下 萌 を 催 す 音 や 春 の 水  
 春の水女の足にぬるみけり  
 春の水とんだの灰にぬるみけり

春 川

春の川泥ぬるくくと迂りけり  
鱧の首出す岸や春の川

凍 解

凍解や戸口にしけるさん俵

春 野

野は春となりけり馬の笑ひ聲  
春の野にうちいでて見たる女哉  
春の野や牛と馬との道二つ

燒 野

野は燒けてすつくり高し一里塚  
雉の聲あらはに悲し燒野原

畑 打

畑打やふじの裾野に人一人  
名所とも知らで畑打つ男哉

種 井

蛙やら種井の中に聲すなり  
ふつくと泡の出て来る種井哉

山 笑

恐ろしき灘をへだてゝ山笑ふ  
故郷やどちらを見ても山笑ふ

春 山

春の山瓢さげ行く女かな  
雲雀程の高さを來たり春の山  
ほんやりと大きく出たり春の不二  
さゝめくや春の山ふみ女づれ  
上野飛鳥高からぬをぞ春の山



猫の戀

猫の戀お堀をこえて通ひけり  
戀猫のあはれやある夜泣寐入  
のら猫や思ふがまゝに戀ひわたる  
二つ来てしばしはよらす猫の戀  
よもすがら簀子の下や猫の戀  
花嫁の聲とも聞かじ猫の戀  
野の宮や垣の内外に猫の戀  
あの聲は何いふ事ぞ猫の戀

秋虎か妻を悼む

戀猫の足の跡あり化粧部屋  
どら猫に戀の名もあり祇園町

鹿角落

曙や福宜の戸口の落し角

季鹿

谷底へうつむく鹿や落し角  
明星や忽然として落し角  
其角の落ちかゝりてや鳴く男鹿

孕鹿若草山を辿りけり  
三日月を夢みて鹿の孕むらん  
石女の春日詣や孕鹿

鶯

鶯や奥商人とつれたちて  
鶯や馬子を相手の鈴鹿越  
鶯や主税今年々十七  
鶯や又この山も汽車の音  
鶯や新聞賣の鈴の音  
鶯や真葛か原の思ひもの

鶯や鳥つゞきの寺の庭  
 鶯やかからたちくゞる身のひねり  
 鶯や人を見て居る逃げかゝる  
 鶯や黒木つたひに八瀬大原  
 鶯や琴柱はつれて逃て行く  
 鶯や旅鶯籠おろす箱根山  
 鶯や鳥境の小笹垣  
 鶯は女に似たり松の枝  
 鶯の二つになりてだまりけり  
 鶯の覺束なくも初音哉  
 鶯の淡路へわたる日和哉  
 鶯の一日鳴くや塚の松  
 鶯の啼きそこなうて逃にけり  
 鶯の下に庭掃く男かな

(鶯の二匹になつて夕哉心連)

鶯や人を尋ぬる隅田川  
 鶯や京へ賣らるゝ小傾城  
 訪人不遇  
 鶯や梅には居らで松の中  
 天外の妻を離縁したるに  
 鶯のなくや三くだり半許り  
 妻におくれたる秋虎がもとへ  
 鶯や朝寐を起す人もなし  
 藤深旅亭  
 鶯や左の通耳りは馬の鈴  
 三味線譜  
 鶯に撥なげつけん破れ窗  
 女の鶯に餌をかふかたに  
 腰元は藪鶯の在所かな

根岸(六句)

雀より鶯多き根岸哉  
鶯や年々ふえる梅の花  
摺小木に鶯とまる根岸哉  
鶯や鄰へ通ふ犬くゞり  
鶯の糞の黒さよ篠の雪  
鶯の黒焼もかな上根岸  
鶯の梅に下痢する餘寒哉  
鶯や梅のあたりに聲がする

病中(三句)

百千鳥

きのふふえけふふえ明日や百千鳥  
入り亂れくつゝ百千鳥  
百千鳥山の上よりあらはるゝ

呼子鳥

木母寺や柳は枯れて呼子鳥  
三井寺の鐘さびついて呼子鳥  
巫峽に猿あり化して鳥となる呼子鳥  
宵々やたゞ鳴きくれて呼子鳥  
何やらの鳴く聲すなり呼子鳥

囀り

囀りや十日許りは日和にて  
都鳥囀つて曰く船頭どの

鳥交

妻こひの鳥啼きたつる松か岡  
鳥さかる明屋の屋根の小草哉

鳥巢

屋根葺の鳥の巢のぞく夕日哉

雀

巢

春宮の軒端かしこし雀の巢

雀

子

雀子や日毎に聲の高うなる

親

雀

いそがしや晝飯頃の親雀

鶯

巢

鶯の巢を見下す岨や五十丈

鶯

鶯なくや花も實もなき梅嫌

麥

鶉

三寸の麥のいづこに啼く鶉

瘦村の晝静かなり麥鶉

雲

雀

揚雲雀啼くや我田の見えぬ時

夕雲雀もつと揚つて消えて見よ

呼べば呼ぶ草と霞の雲雀哉

大砲の煙のを上に下に舞雲雀

二月廿六日朝夢中一句を得たり

から白に落て消えたる雲雀哉

燕

山里は梅さく頃の燕哉

引舟に乗て引かるゝ燕哉

時頼の留守にも來たり燕

烏帽子屋の店に舞ひけり燕

春風に顔ならべけり燕の子

燕に祇王の家は知られけり

燕の窗にゐならぶ田舎哉

腹つけて燕とび行く小川哉

難破船

あら海や燕ゆるるゝ椀の上

晝棟朝飛南浦雲

高どのや雲に巢をくふ燕

活々坊泥足のまゝにて大名の式臺に上り寐たる處を讀みて

燕の足より太し泥のあと

雉

一村は谷の底なり雉の聲  
足引の山もさけよと雉の聲  
豆腐屋の豆腐を崩す雉の聲  
尾のさきのつゝじに餘る雉子哉  
岩角をふんばる雉の高ね哉  
雉子鳴く嵯峨野の奥や雨ほろく

歸

雁

雉鳴くや庭の中なる東山  
雉鳴くや背丈にそろふ小松原

歸るとて雁は二つに分れけり

歸る雁臑に奈良や見ゆらんか

松前の雪が見ゆるか歸る雁

道づれにせばやなうく歸る雁

千嶋へ行く短艇を送る

歸る雁七艘ならぶ船の上

鳥雲に入

朝鳥のいくつ箱根の雲に入  
鳥の飛ぶ道や一すぢ雲に入

引鶴

引鶴やいざわれのせて故郷へ

白魚

引鶴やまた切れ風をさそひ行く  
引鶴や鳶より上を飛んで行く  
引鶴や頼朝死して七百年

白魚のひんとすねたる姿かな  
白魚のすみ田河原と申さばや  
白魚や水へ戻さば泳ぐべし  
白魚や簀こほれて煮ゆる水  
白魚や椀の中にも角田川  
白魚や月の夜念佛もろとも  
思ひきや白魚汐にそだつとは  
わつて見せたい胸の内  
白魚の其はらわたも猶白し

柳鮓

足音にはつと散りけり柳鮓  
土手三里こえて池あり柳鮓

飯鮓

飯鮓や雪にならべる越の國  
飯鮓や身を八つさきのなれのはて

鮓

湖やもろこ釣る日の薄曇り

若鮓

足もとに小鮓飛ぶなり夕まくれ  
玉川や小鮓たばしる晒し布  
草にさして小鮓提げたり里童  
ちらくと小鮓ののぼる夕日哉  
砂川に鍋ふみかへす小鮓かな

櫻 鯛

櫻鯛 頃は明石の月夜哉  
松原や荷ひつれたる櫻鯛  
俎板に鱗ちりしく櫻鯛

蛙

蛙 鳴く井手の玉川春深し  
蛙 鳴く浅瀬もありや大井河  
蛙 鳴く水田の底の底明り  
蛙 鳴く處々や水明り  
逃げさまに足つかまれし蛙哉  
飛びこんで泥にかくるゝ蛙哉  
枯蘆の中にごそつく蛙哉  
名所に住んでつたなき蛙哉  
牛の子に踏み出されたる蛙哉  
新田に聲うす鹽の蛙哉

蛇穴を出る

春もはや蛙鳴くなり手水鉢  
たそがれや蛙の小道牛戻る  
蛇穴を出るや其まゝ臍を巻く  
蛇穴を出るや社の古榎  
蛇の穴を見すてる日和哉

胡 蝶

折々は馬の尾近し寐る胡蝶  
牛寐るや一かたまりに飛ぶ胡蝶  
草の葉に兒の這ひよる胡蝶哉  
くみあうて一つに見ゆる胡蝶哉  
垣こえて又低く飛ぶ胡蝶哉  
小比丘尼の撮みかねたる胡蝶哉  
二三町出舟追はへる胡蝶哉

何色に染めても若き胡蝶哉  
横にくみ堅にほくれて蝶二つ  
ひらくと風に流れて蝶一つ  
萍の生初て蝶のやどり哉  
そよくと胡蝶の鬚のたわみ哉  
蓬生や蝶吹き返す夕嵐  
胡蝶三つ二つ一つに分れけり  
蝶一つひらくと又一つ  
蝶舞ふや太刀ふりかざす居合拔  
蝶々や人なき茶屋の十圓子  
蝶飛ぶや二子の山の山はづれ  
蝶々や下山の若衆たゞ一人  
初蝶のさはれば折れる枯薄  
初蝶や氷見つけてとまらんとす

## 旅行

蝶とぶや道々かはる子守歌

## 莊子

石に寐る蝶薄命の我を夢むらん

馬の股ぬけつくゞりつ蛇遊ぶ

蛇よ蛇世にうとましき名なりけり

蜂一つ花なき比枝を上り行く

熊蜂のふし穴のぞく日和哉

## 春蚊

春の蚊や一つとまりし雛の顔  
春風の塵かと思れば蚊の一つ  
獨酌のある夜春の蚊あらはるゝ



蠶

ほちくくと桑くふ夜の蠶哉  
夕月やほのく白き蠶棚  
賤が家に蠶は白く牛黒し  
蠶飼せぬ上野人はなかりけり

田

蝶

馬引て松明ふれば田蝶鳴く  
賣られてや京の真中に鳴く田蝶

寄居蟲

やどかりやしはしは須磨の中納言  
やどかりも蟹のたぐひか檀の浦  
やどかりに我身の上を語らばや  
やどかりの家ふりすてゝ逃にけり

蛤

蛤の荷よりこぼるゝうしほ哉

蜆

すり鉢に薄紫の蜆かな  
蜆掘開一寸をさぐりけり

馬

刀

面白や馬刀の居る穴居らぬ穴

櫻

貝

膳の上にくへぬものあり櫻貝

梅

風邪引のあるじ持ちけり梅の花  
山寺に京の客あり梅の花  
いも粥の名所よさて梅の花

旅人や鞍につけたる梅の花  
蠣殻のうしろに白し梅の花  
病人に一枝見せん梅の花  
ひしくと杉の木の間や梅の花  
山里や大根干す木に梅の花  
松一木あちらむきけり梅の中  
何といふ鳥かしらねど梅の枝  
瑞垣や杉ほの暗く梅白し  
名所に住むや梅さく只の家  
苔一つ二つは梅のすはえ哉  
病人が盆栽の梅咲きにけり  
琴の尾や螺館に梅のちらし咲  
梅さくや行盡江南數十程  
鉢の梅浮世の義理に開きけり

(鯉の普水ほの暗く梅白し)

(八朝や義理に顔出す梅の花)

蓑蟲は留守かお宿か梅の花  
室の梅花なき春は來りけり  
梅もたぬ根岸の家はなかりけり  
隠れ家や梅ちる時の面白き  
鎌倉は屋敷のあとの野梅哉  
蜷蜷畑畑に去來があとか梅の花  
うれしやな都出る日の梅日和  
旅中口吟(二句)  
岡あれば宮宮あれば梅の花  
家一つ梅五六本こゝもく  
鶴岡八幡  
銀杏とはどちらが古き梅の花  
金杉や梅にかけたる賣家札

紅梅

梅の花ついたち頃の夕かな

秋虎の妻を悼む

わりなしや櫓にまじる梅の花

悼武智老儒

極樂や君が行く頃梅の花

病中

一枝は薬の瓶に梅の花

青屋氏の閑栖をとふ折から舊臣より同氏に送りにせし

文の末に且那樣とあるを取りて

面白や梅三本の且那樣

紅梅や萬歳ばかり烏帽子にて

紅梅や女三の宮の立ち姿

紅梅や柴舟見ゆる垣の外

紅梅の咲くより猫の静かなり

紅梅に櫓は古びぬ翠簾作り

根岸草庵

紅梅の鄰もちけり草の庵

妻におくれたる秋虎のもとに遣す

思ひ出す頃を紅梅のさかり哉

三平二滿畫譜

其鼻や頬や紅梅の二三輪

柳

とびこんで鶯見えぬ柳哉

川ありと見えてつらなる柳哉

街道に餘の木もませぬ柳哉

橋落てうしろ淋しき柳哉

二三尺はや風うける柳哉

夜な／＼の辻君かくす柳哉  
人道と車道を分る柳哉  
老い易くはた老い難き柳哉  
辻まぢの車の上に柳哉  
馬の尾の折々動く柳哉  
菅笠にはらりとかゝる柳哉  
青柳の形定まらぬつむじ哉  
青柳や人身御供の池も春  
どちらともつかぬ柳や村境  
夕風や柳吹きこむ窓の内  
逆髪は風に柳の名なるべし  
土橋あり柳かくれの馬の鈴  
柳とは酒屋が前のものならし

猿澤池

身をなげた名所めでたき柳哉

夢想

渺々と緑つらなる柳哉

阿曇圖

あちへゆらりこちへゆらりと柳哉

春江送人

舟と岸柳へだつる別れ哉

半面美人圖

青柳に顔なでられて横へ向く

さし柳

井戸ばたと知らて芽さすやさし柳  
さし柳しだれんとして上に向く

梅柳

京を出る旅人多し梅柳

木 芽

鉦あげてきらんとすれば木の芽哉  
枯枝と知れてものうし木の芽時  
木の芽とは豆腐の上に生ふる者なり

接 木

來年の命を契る接木哉

讀北條史

鎌倉に九代榮ゆる接木哉

椿

首塚や首のもけたるちり椿  
ふみつけて蹄はなれぬ椿哉  
息杖のさきにひつゝく椿哉  
から臼の中に落ちたる椿哉  
うつぶせに椿ちるなり庭芝の上の隅イ

初 櫻

山道や椿ころけて草の中  
赤椿さいてもく一重哉  
花椿こほれて蛇のはなれけり  
素香亭  
古池にちりこむ梅かな椿かな

五六本咲くや吉野の初櫻  
無住寺の鐘ぬすまれて初櫻  
初櫻木曾の手紙に雪がふる

鎌郷の新婦を祝ひて

嶋臺に梅も残りて初ざくら

絲 櫻

咲きまじる柳の中の絲櫻  
家二つ狭きが中の絲櫻

櫻

絲櫻下の方より咲きにけり

馬方の櫻見かけて唄ひけり

名をもたぬ京の櫻はなかりけり

牛部屋の薄花櫻さきにけり

有明に三分傾く櫻哉

目隠しの女あぶなし山櫻

男より女の多し山櫻

辨慶の指のあとあり山櫻

草臥てよし足引の山櫻

須磨

敦盛の鎧に似たり山櫻

吉野山

南朝の櫻今年も咲きにけり

花

上野

木の間に白きもの皆櫻哉

第二子をまうけたる人に

初櫻二番櫻も咲きにけり

戒

山櫻戀をはなれて哀れなり

花咲て王子の森の黒さ哉

花にぬれて樽に綿衣をぬぎかけし

花に妾世に一日の閑を得たり

伽羅くさき風が吹くなり京の花

鳴雪翁俗時の肖像に題す

まほろしや花の夕の蟬衣

兼久通後の争へる事を

花の雲

なくも哉花こそ人の喧嘩なれ

東歌春雲 東都八春詞の一

大佛や花にもならぬ雲の上

少しづつ在所々々の花の雲

がけ端やあぶなくかゝる花の雲

東都

ぼんやりと埃の中に花の雲

花の雲

朱の鞍や花の吹雪の馬つなぎ

蓑笠や花の吹雪の渡し守

山里や月もなき夜の花吹雪

牛の背や鹿の子まだらの花吹雪

牛嶋や牛歸る頃の花吹雪

朝櫻

花の雪筑波の山にふりかゝる

飛鳥山

我庭や上野の花の花吹雪

根岸草庵

横雲もたのみありげや朝櫻

有明や忠度花をいでて行く

寒げだつ賤か夜明や花時雨

夕櫻

夕櫻鐘つき殿に物申す

三井寺をのぼるともしや夕櫻

阪本の人家暮れたり山櫻

月代やたそがれ櫻風ふくむ

夜 櫻

門の花夜行く人の小唄哉  
持重しげの月夜櫻の雫かな  
ふるへどいもい朧夜櫻露もなし  
灯のともる雨夜の櫻いちらしや  
夜櫻や辻燈籠の片うつり  
うつくしき櫻の雨や電気燈  
片枝は夏へまたげて遅櫻  
大方は忘れられけり遅櫻  
遅櫻静かに詠められにけり

遅 櫻

片枝は夏へまたげて遅櫻  
大方は忘れられけり遅櫻  
遅櫻静かに詠められにけり

姥 櫻

我知らじ老いたるをこそ姥櫻

十三秋色櫻の年より咲て姥櫻

墨 染 櫻

ほのめくや墨染櫻夕月夜

花 盛

花盛りくどかば落ちん人ばかり  
釣鐘の寄進出来たり花盛

花 曇

花の空薄紅に曇りけり  
花曇都の隅の飛鳥山

散 櫻

花ちるや法華の太鼓禪の鐘  
炭竈の上にくづるゝ櫻かな  
ほろくとひとりこぼるゝ櫻哉  
花散て此頃はやる頭痛哉

忠度宿花下圖



山櫻夢を埋めて散りにけり

日暮里花見寺

踊れく花のちる迄暮るゝ迄

病中

花ちるや人にうつりしはやり風邪  
小柄杓の底にひつゝく櫻哉  
散る櫻たゞ悲しさよ嬉しさよ  
筆とれば短冊の上に櫻ちる  
花散るや昔に戻る蛙茶屋

男女藍落の圖に

さそはれて面白く散る櫻哉  
宮守の風折烏帽子櫻散る

櫻狩 櫻狩上野王子は山つゞき

花見 二の尼の一の尼とふ花見哉

すさましや花見戻りの下駄の音

花見衣 入相や花見小袖の一衣桁

花見車 紋は誰花見車の人もなし

花守 花守の花よりさきに老にける

花守や蝨ふるへばちる櫻

梨花 小原女の薪にまじる梨の花

梨の花折るべき枝はなかりけり

李花

眞白に李散りけり手水鉢  
羽はたききに李雪ちる鳥哉

杏花

山梨の中に杏の花さかり

海棠

海棠は鏡見せたき姿哉

楊貴妃畫讚

海棠の寐顔に見ゆる笑くほ哉

木蓮花

風吹て裸なりけり木蓮花

桃花

柳青しあひまくの桃の花  
小娘の畑打つ頃や桃の花  
四方からよるや野中の桃の花

(萬歳の畑うつ頃  
や桃の花也有)

賤か家の垣根うつくし桃柳

桃雨亭に宿す床に許六の畫ける桃の幅をかけたりければ

灯を消せば許六の桃のかをり哉

木瓜花

近江路や茶店々々の木瓜の花  
溝ありて背戸は垣なし木瓜の花  
草むらや董まじりに木瓜の花  
江戸を出て木瓜の花垣めづらしや  
よく見れば木瓜の苔や草の中  
初旅や木瓜もうれしき物の數

山椒皮剥

面白や月に山椒の皮剥げば

餅

餅くふや葎簀に見すく山つゝし

竹の秋

つみこんで四角に咲きしつゝじ哉  
築山の裏に淋しきつゝじ哉  
馬引てつゝじの小道歸り行く  
寛ありつゝじは赤く米黒し  
塀ごしに庄屋のつゝじ見ゆるなり

薺

蘆はまだ難波のうらの竹の秋  
古澤や泥にまみるゝ芹薺  
薺打つ人ところ見れ五百石

芹

一籠の蜆にまじる根芹哉  
うれしくも芹生ひけらし井戸の端  
芹賣に出して見せたる小判哉

野老

花も葉もなしや野老の老の露

嫁菜

どれも皆うしろ姿や嫁菜つみ  
嫁菜つむ王子は京の田舎哉

若菜

白紗の君が手見せよ若菜摘  
真間は今入江のあとの若菜哉  
牛の子の柵に首出す若菜哉  
嵯峨へ行き御室へ戻り若菜哉  
幸の鍋に摘みこむ若菜哉  
雪のけて見ればうれしき若菜哉

露の臺

庄内や雪の中より露の臺

露の臺福壽草にも似たりけり  
露の臺藪の隅より現はれし

干 蕪 雀逃げぬ吹矢はそれて干蕪

干 大根 首途の太刀にはかばや干大根

若 草 若草に見るく馬の肥にけり

若 草 若草に雲雀と遊ぶ子供哉

草 芳 野邊の草草履の裏に芳しき

蕪 若葉 捨て草鞋蕪の若葉のはひかゝる

蘆 角 しをらしき物を名つけて蘆の角

難波江や干潟の限り蘆の角

牛の子の水のむ川や蘆の角

武藏野やすくろの薄小雨ふる

海 雲 白魚のもつれこんだる海雲哉

海 雲 わりなくも箸にかゝらぬ海雲哉

海 苔 海苔搔の股の下なり安房の山

女漕ぐ棚無し小舟海苔の中

和 布 中國の山どれくぞ和布取

和布とる人か夕日の磯歩行  
和布干す蟬が垣根の日和哉

防風  
こりくくと老が齒なやむ防風哉

葱のきぼ  
見えかゝる叔父の閑居や葱のきぼ

苗代  
苗代のへりをつたうて目高哉  
苗代や蛙の座敷青みたり

君か代や苗代時の物しづか  
すみさるや苗代水の上流れ

夜の雨や苗代青むさゝ濁り  
市中や苗代時の鯰賣

菫  
傘さして葦つむ人のにくさ哉

春菊  
春菊や今豆腐屋の聲すなり  
春菊や長屋の庭の夕ながめ

茗荷  
すさましや庫裏のうしろの茗荷竹  
茗荷とは蟲さへくはぬ名なりけり

蓮根掘  
燕のとびかふ下や蓮根掘

菊苗  
垣ごしに菊の根わけてもらひけり

萍生初  
萍や池の真中に生ひ初る  
萍や漫々たる江に生ひ初る

蕨

山里や簀子の下のかぎ蕨  
おぼこ氣を握りつめけり初蕨

杉

すさましや杉菜ばかりの岡一つ

茅

おそろしき迄穂に出る茅花哉  
故郷や茅花ぬきしは十餘年

蓮花  
草

もの出来ぬ瘦田うつくし蓮花草

蒲公英

春老てたんほゝの花吹けば散る  
たんほゝや根岸あたりの貸地札

虎杖

山陰に虎杖森の如くなり

薊

振袖をかざして通るあざみ哉

大根花

蛇なりと遊べ大根の花ざかり

青麥

青麥やあうてもくしらぬ人

小米花

山吹の垣うら白し小米花  
井戸ばたにこぼれて白し小米花

薑

山鳥の遊びに出たる薑かな  
うつくしき蜥蜴も出たり花薑  
春日野の女くさゝよ花薑  
色薄し夕山陰の花薑

山

吹

傾城の董は瘦せて鉢の中  
掘崩す土手のはづれの董かな  
石かけや石に根をもつ花董  
小娘が足の血に泣く董かな  
牛の子にくひ残されし董哉  
橋本は董さく野となりけり

山吹や人形かわく一むしろ  
山吹の下へはひるや鮪取  
水かふや山吹つゝく馬の鼻  
風吹て山吹蝶をはね返し  
風吹て山吹に灯のみだれ哉

王子村松字亭

山吹の上の家あり雪操居

道灌園

むかばきに八重山吹の亂れけり

菜

花

菜の花や焼場の煙たえん  
菜の花や野中の寺の縁の下  
菜の花や物見に上る姫御前  
菜の花や道者よびあふ七曲り  
菜の花の野末に低し天王寺  
菜の花のさく頃里の餅赤し

根岸

ふらくと行けば菜の花はや見ゆる

永き日やそのしだり尾の下り藤  
何色に振袖そめん藤の花

藤

夏

卯

月

色々の子牛出揃ふ卯月哉

牛の子の眼を開きたる卯月哉

ぬぎかへて衣に風吹く卯月哉

厩橋落成

鐵橋のさつはりしたる卯月哉

彌 讚

寐ころんで酔のさめたる卯月哉

訪友人

雀にも友ある中の卯月哉

五

月

ほろくと墨のくづるゝ五月哉

かんざしの蝶ちらつくや藤の花  
誰やらの紋に結ばん藤の花  
風吹て逃るやうなり藤の花  
我笠に藤ふりかゝる山路哉  
龜 戸  
反橋や藤紫に鯉赤し



六月

病中  
うすくと窓に日のさす五月哉

水無月や白粉なする腋の下

奥州旅中

水無月やこゝらあたりは鶯が

葉翁氏の家に宿りて

水無月をもてなされけり郭公

三伏の暑中山吹の多く咲きたるを

山吹の水無月とこそ見えにけれ

傾城讚

六月や太夫となる身罪深し

秋近

鏡見てゐるや遊女の秋近き

秋近し七夕戀ふる小傾城

夜話や浦の苦屋の秋近き

松が根に小草花さく秋近

山里や秋を鄰に麥をこぐ

仙臺を出る時歸京の後再會み槐園に契りて

秋近し桔梗を契る別れ哉

夏雑

黒塚や傘にむらがる夏の蜂

憎らしや夏を肥たる小傾城

根岸草庵

十薬や落や茗荷や庵の庭

葛の松原に思ひて

人屑の身は死もせで夏寒し

仙臺南山閣

四方から青みし夏の夜明哉

關山越

ほの暗きとんねる行けば夏もなし

この夕秋立つといふに

ずんくと夏を流すや最上河

酒田翠松館 (東は家屋覺を並べ西は大海渺として際なし)

前後暑さ涼しさ半分づつ

瘧疾の時連磨の像に對して

此夏を我と達磨の寒さ哉

南洋人の歸國を送るとて

椰子の陰に語れ牡丹を芍薬を  
山を入れ海をひかへて夏景色  
やぶ入や眞つ晝中の閻魔堂

短夜

短夜や夜明にとどく足の先

短夜やたてあふ早出起き残り

短夜や逢坂こゆる牛車

短夜のうしろに睨む仁王哉

短夜の雲をさまらすあたゝらね

短夜の雲もかゝらず信夫山

短夜のまことをしるや一夜妻

短夜は碁盤の足に白みけり

短夜もあくるけしきは東より

猫の尾の短夜明けぬ臺所

朝妻舟讚

短夜や波の鼓の音早し

芳原

夏夜

短夜は大門に明けてしまひけり

傾城 讀

だまさされて夜は明やすし絹蒲團

傾城をよぶ聲夏の夜は明けぬ

猫鼠 畫讀

恐ろしき夢見て夏の夜は明けぬ

曇

あら壁に西日のほてるあつさかな  
松陰はどこも錢出すあつさかな

送秋山眞之々英國

暑い日は思ひ出せよふじの山

暑さ哉八百八町家ばかり

病 中

ぐるりからいとしがらるゝ暑さ哉

犬の子の草に寐ねたる暑さ哉  
晝顔の花に皺見るあつさ哉  
紫のさむる茄子のあつさ哉  
やるせなき夕立前のあつさ哉  
雨折々あつさをなぶる山家哉

歳 中

我部屋は茶代も出さぬ暑さ哉

村 市

やせ馬の尻ならべたるあつさ哉

しやもの毛のぬけてものうき暑さ哉

焙ふくふいごの風のあつさ哉

岩代二本松にて

幾曲りまがりてあつし二本松

掛茶屋のはこりに坐るあつさ哉

雨雲の峯になり行く暑さ哉  
雨晴れて又あらたまる暑さかな  
暑き夜の寐られぬよその話かな  
晝時に酒しひらるゝあつさ哉

仙臺愛宕山門前にて

小天狗の前に息つく暑さかな  
店先に車夫汗くさき暑さかな  
車夫歎  
妾にも生れんと思ふあつさ哉

旅中山の清水に鞍鼻禪を洗ひそを革包に結びて乾しな

がら行く

手荷物にふんどしさがるあつさ哉  
道々に瓜の皮ちるあつさ哉

馬にて引きたる荷車に順禮二人打ちのりたるを見て

順禮の馬子拜みたるあつさ哉  
馬蠅の傘をはなれぬ暑さ哉  
馬車店先ふさぐあつさ哉  
博奕うつ間のほの暗き暑さかな  
夕まぐれ馬しかる町のあつさ哉  
腹痛に寐られぬ夜半の暑さ哉  
みちのくも町あれば町の暑さ哉

旅宿にて

くたびれを養ひかぬる暑さかな  
あつき名や天竺牡丹日でり草  
晝顔はしほむ間もなきあつさ哉  
裸身の壁にひつくあつさ哉  
むし暑し鼠でも出よかりて見ん  
ひゝわれて苦なき庭の暑さ哉

庭石を草のうめたるあつさ哉  
石原に片足づつのあつさ哉  
天竺の手紙届きし暑さ哉  
おろす子の泣聲あつし石の上  
行列の町に入りこむあつさ哉  
著物干す營所の庭の暑さ哉  
上野から見下す町のあつさ哉  
ぬれ足に河原をありく暑さ哉  
あつき日や硯の中の砂ほこり  
錫杖のさはればあつし一休み  
油畫の彩色多きあつさ哉  
歟たてゝあたり人なき暑さ哉  
小蒸汽の機械をのぞく暑さ哉  
頭陀一つこれさへ暑き浮世哉

屋根葺の日陰へまはるあつさ哉  
さはるもの蒲團木枕皆あつし  
上客に内處見らるゝあつさ哉  
あつき日や肌もぬがれぬ女客  
動かれぬ遊女の罪のあつさ哉  
傾城にいつはりのなき暑さ哉  
傾城の寐顔にあつしほつれ髪  
海士が家に干魚の臭ふあつさ哉  
我宿は女ばかりのあつさ哉  
眞白に石灰やきのあつさ哉  
観音に人波のうつあつさ哉  
傾城は誠にあつき者なりけり  
あつき日や運座はじまる四疊半  
此あたり土藏の多きあつさ哉

眞晝時辨當部屋のあつさ哉  
濱庇未<sup>ヒツジ</sup>まはりし暑さ哉  
大佛を見つめかねたる暑さ哉  
小格子にほこりのたまる暑さ哉  
ぬり直す仁王の色のあつさ哉  
氣違ひの壁叩きたる暑さ哉  
破れ垣の鄰見えすく暑さ哉  
たゞあつし起てもゐてもころんでも  
出立の飯いそぎたるあつさ哉  
傾城讚(三句)  
人にまかす身とは思へど暑さ哉  
金銀の襖にあつき地獄哉  
南洋人來朝す  
椰子の實の裸で出たる暑さ哉

病中

猶暑し骨と皮とになりてさへ

炎

天

炎天の色やあく迄深縁

炎天の中にほつちり富士の雪

炎天や膝行車の砂路行く

炎天をわたるや鷺の只一羽

鹽釜神社

炎天や木の影ひえる石だたみ

日

盛

日さかりやうつとりとなる池の鯉

日さかりや海人が門邊の大碇

日さかりに兵卒出たり仲の町

早

土

用

夕虹の雨氣にうとき早哉

松嶋の松見に行かん土用の入  
柿の實の青くて細き土用哉  
松嶋に風のさかりの土用哉

涼

し

涼しさや闇の夜中の水の音  
夜も更けぬ妻も寐入りぬ門涼し  
闇涼し灯影ちらつく枕橋  
涼しさや雫を落す杉の月  
武蔵野や細くすゞしき三日の月  
涼しさを取にがしたる鯉かな  
すゞしさを四文にまけて渡し守

宇治懐古

涼しさや川打ちわたす馬もなし

嵐山

涼しさにかたよる櫻楓かな

太神宮

杉木立土につく手のうらすゞし

人に對して

涼しさや君とわれとの胸の中

久米平内像

すゞしさに平内石となりけり

硯

すゞしさを雲湧き起る海三寸

わがわづらへる頃鐘眼師の北海道へ渡ると聞き侍りて

一句を呈す

涼しさやわれは禪師を夢に見ん

天外が持てる某妓の寫眞に題す

すゞしさを此著物さへぬきすてす

某氏亭(二句)

涼しさや池あり木あり鳥啼く

涼しさや上野の森も庭の中

素香孤松二氏閑齋

すゞしさを月に二人の亭主あり

關涼し川の向うの笑ひ聲

涼しさや驚も動かぬ杭の先

ある人のもとにて

盗人もはひる此家のすゞしさを

網さげて涼しさうなる雫哉

涼しさや目高追はへる女の子

白河結城氏城址

すゞしさを昔の人の汗のあと

夏すゞし川や馬つなきたる橋柱

淺香沼

すゞしさを只水くさき匂ひかな

草負うて背中にすゞし朝の露

二本松満福寺

すゞしさを神と佛の鄰同士

黒塚(二句)

木下關あゝら涼しや恐ろしや

すゞしさを聞けば昔は鬼の家

満福寺に宿りて(二句)

御佛に尻むけ居れば月涼し

寺に寐る身の尊さよ涼しさよ



月涼し蛙の聲のわきあがる  
笛の音の涼しう更くる野道哉  
すゝしさは燕のし行く田面哉

福嶋公園眺望

見下せば月にすゝしや四千軒

福嶋菖蒲の古跡にて (二句)

涼しさの昔をかたれしのぶすり  
うつぶけに涼し河原の左大臣

十綱の橋

つり橋に亂れて涼し雨のあし

岩代國湯野村

すゝしさを瀧ほどばしる家のあひ  
涼しくもがらすにとほる月夜哉

七月廿六日岩代飯坂温泉にて夢中の句

涼しさや羽生えさうな腋の下

笠嶋道祖神にて

われはたと旅すゝしかれと祈るなり

鹽竈神社より浦邊をめぐりて

涼しさの猶ありかたき昔かな

篠か嶋

涼しさのこゝを扇のかなめかな  
涼しさやかもめはなれぬ杭の先

鹽釜の浦にて

しほ釜は涼しかりしか昔こそ

松嶋雜詠 (十二句)

すゝしさの眼にちらつくや千松嶋  
すゝしさの腸にまで通りけり

すゝしさをや片帆を異帆に取直し  
すゝしさをや舟うつり行く千松嶋  
嶋あれは松あり風の音すゝし  
涼しさをやさらに月なき千松嶋  
涼しさのほのめく闇や千松嶋  
涼しさをや嶋かたふきて松一つ  
すゝしさをや大嶋よりも小嶋哉  
すゝしさをや嶋あり松あり白帆有り  
すゝしさをや名はなれぬ名なり千松嶋  
涼しさをや名はなくもがなの千松嶋  
瑞巖寺  
經の聲はるかにすゝし杉木立  
松嶋五大堂(五句)  
をさ橋に足のうら吹く風涼し

涼しさをや嶋から嶋へ橋つたひ  
涼しさをやともしちらつく五大堂  
灯ちらく人影すゝし五大堂  
涼しさをや畫にもかゝるゝ五大堂  
雄嶋  
涼しさを裸にしたり坐禪堂  
富山紫雲閣より松嶋を望む(二句)  
袖涼し嶋ちらばつて十八里  
すゝしさをのこゝからも眼にあまりけり  
鹽籠海中の藻を此あたりにて何と呼ぶやと問へば藻沙  
草といふとぞ答へける  
すゝしさをや海人が言葉も藻沙草  
立ちよれば木の下涼し道祖神  
鹽かまのほとりにある野田の玉川末の松山などは皆眞

の名所にはあらずと聞きて

涼しさにうその名所も見て行きぬ

多賀城の碑を見て

のぞく目に一千年の風涼し

仙臺南山閣(二句)

涼しさのはてより出たり海の月

野も山もぬれて涼しき夜明かな

政宗公廟前

すゝしさや君があたりを去りかぬる

二階からつかむ木末や風涼し

槐園に別れて南山閣を辭す

すゝしさを君一人にもどしおく

馬子歌のはるかに涼し木下道

上下の瀧の中道袖すゝし

作並温泉(四句)

涼しさは下に水行く温泉哉

ちろくと焚火涼しや山の家

涼しさや行燈うつる夜の山

窓あけて寐さめ涼しや檐の雲

雲にぬれて關山こせば袖涼し

關山越に古風なる袴はきし少女を見てよめる

袴はく足もと涼し昔ぶり

關山越の隧道にて(三句)

涼しさや羽前をのぞく山の穴

隧道にうしろから吹く風すゝし

隧道のはるかに人の聲すゝし

すゝしさや關山こえて下り道

すゝしさを碎けてちるか瀧の玉

鶉むれて夕日すゝしき野川哉  
涼しさや青田の中の一つ松  
夕雲にちらりと涼し一つ星  
灯をともし一村すゝし山の陰  
風鈴のほのかにすゝし竹の奥  
すゝししさの一筋長し最上川  
すゝししさの真中を下す小舟哉  
すゝししさや足ぶらさげる水の中  
とちらから吹ても庵の涼しさよ

青宜幹雄江左三老人と同座して

風涼し中に鬚なき一人かな

鳴雪翁宅にて翁の歸りを待つ

すゝししさやあるじまつ間の肘枕  
すゝししさや小舟のりこむ蘆の中

すゝししさや臍の真上の天の川

王子松宇亭

すゝししさの鄰をとへば正一位

品川

涼しさや海にそなたる一廓

權現森夜雨(王子八景の一)

聞てゐて涼しや闇の雨三更  
涼しさや子をよぶ牛も川の中  
牛のせて涼しや淀の渡し舟

白拍子讀

月涼し水干露をこぼすべう  
涼しさや裸でこゆる宮根山  
草枕涼し三千の姫小松  
涼しさは大竹原のそよぎ哉

照 射

涼しさや上葉下葉の蓮の露  
布袋涼し袋の風を少しつゝ  
涼しさは波にゆらるゝ鷗哉  
涼しさに念佛申すや寺詣り  
岩三方薨を走る雲涼し  
墓は皆涼しさうなり杉木立  
風吹てちららゝ波の涼しさよ  
涼しさや芭蕉も神に祭られて  
一つく吹く風涼し笛の孔  
涼しさや爪弾ならふ舟の中  
雨雲のうら照り返す照射哉  
一里来て二里来て見えぬ照射哉

火 串

傾城の夢に殿御の照射哉  
獲物多き照射の夢はさめにけり  
火串ふつて闇の真中を上り行く

龍門の獲師の話をよみて

鶺鴒 飼

烏羽玉の闇の色なるあら鶺鴒哉  
風吹て篝のくらき鶺鴒川哉  
傾城の娘もちける鶺鴒匠哉  
鶺鴒飼舟雨になりぬるうれしさよ  
面白やはつと放せばあら鶺鴒とも  
晝の鶺鴒の来てとまりけり牛の鞍  
闇の夜を鶺鴒飼の妻の泣く頃か

川狩

川狩や脇指さして水の中

藻刈舟

藻を刈るや女にばけるのら狐  
藻刈舟雨ふるかたへ歸りけり

眞菰刈

物いへば女なりけり眞菰刈  
眞菰負うて眞菰を出でぬ眞菰刈

田植

兼平の塚を目あてに田植哉  
赤阪の御油へつとく田植哉  
日焼田に覺東なくも田植哉  
笠を著て誰に田植の薄化粧  
嶋原や晝はものうき田植歌  
そばふるやあちらこちらの田植歌

早乙女

晝にかけば菅笠ばかり植をとめ  
さをとめや泥から生えし足の色  
さをとめや牛は固より黒きもの  
さをとめの一むれ歸る小道哉  
さをとめのならぶや宮を尻にして

田草取

汽車行くやひんと立たる田草取  
菅笠も三番草のふるび哉

竹植

竹植ゑてうれしき窗の青み哉

薬日

薬日や御殿の屋根の承露盤

菖蒲刈

御鎌取て菖蒲刈らうよ泥干潟

菖蒲ふく

菖ふく乞食の女房孕みけり  
菖ふいて岡崎女郎衆の薫り哉  
かつまたの池の雫やふきあやめ  
風吹て燕の落すあやめかな

菖蒲湯

菖蒲湯や中に交りし菖蒲刈

菖蒲酒

屈原は下戸なりけらし菖蒲酒

菖蒲太刀

いかめしき兒のありきや菖蒲太刀

幟

幟たてゝ嵐のほしき日なりけり  
雨雲をさそふ嵐の幟かな  
おもしろくふくらむ風や鯉幟

送猿男之周防

山里の幟見て來よ京男

薬玉

薬玉のふさふりさばく思ひ哉  
薬玉にかくれうせたる禿哉

粽

傾城をかむろとりまく粽哉  
霰ふることもありしか笹粽

印地打

蚤の子や男女わかれて印地打

騎射

騎射の晝や孫あつめて翁物語る

競馬

風吹てほこりにいさむ競馬哉

大矢數

大矢數中にまじりて山法師

花御堂

王城や見事に出来て花御堂  
大佛の麓に低し花御堂

竿のつゝじ

風吹て花ふる竿のつゝじ哉

夏籠

夏籠に瘦せる禿のあはれなり  
二人ならば夏籠せんと思ひけり  
君は今夏に籠るとぞ聞えける

置物藁讀

夏籠の我に向ふらイむか卓の上

夏書

穢多の子の窓からのぞく夏書哉

蟲干

蟲干や牛を飼うたる先祖あり  
蟲干や幻住庵の蓑と笠  
土用干や裸になつて旅ころも  
蟲干の魂入れる鎧かな

瑞巖寺

政宗の眼もあらん土用干

晝寐

一山をこして麓の晝寐かな  
掛茶屋は盧生に似たる晝寐哉  
晝めしの腹を風吹く晝寐哉  
傾城の晝寐はあつし金屏風

富士詣

不二詣水無月の雪に餓もかな  
不二詣鳥の鳴かぬ朝清し



富士垢離

短夜の限りを見たり不二詣  
月も日も夢の下なり不二詣  
紅の朝日すゞしや不二詣  
うたゝねの夢に攀ちけり額の不二  
蟻一つ居ぬ下界と見えて不二涼し

祭

不二垢離にゆうべの夢を洗ひけり  
辨慶の餅くうてある祭哉  
夕立の空とぼけなる祭哉  
錦著て牛の汗かく祭かな  
牛かひや京の祭の櫻笠

仙臺愛宕山眺望

游 泳

川中に頭そろへておよき哉

祇 園 會

祇園會や小道々々の人の蟻  
祇園會や錦の上に京の月  
月 鉾 や 空 に 賑 ふ 乙 鳥  
入相のなり行く上を鉾の兒

晒 井

晒井や釣瓶におよぐ五年餅  
晒井や縄引きあまる裏戸口

納 涼

不二見えて火の見櫓の涼み哉  
根岸かな琴にもたれて端涼み  
山僧の市へ出でたる納涼哉

松嶋一見せんとて上野の汽車にのりて

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて

二本松満福寺

廣しきに僧と二人の涼み哉

福嶋

公園に旅人ひとり涼みけり

飯坂温泉にて十六七の小者来りて頼りに米國の事など聞く

わけを質せば渡航の志ありといふ僻地に似合はぬ志をめで

て話などする序でに其名をとへば平藏となん答へける

平藏にあめりか語るすゝみかな

奥羽漫遊途次仙臺客舎にて

行きついた宿におちつくすゝみかな

仙臺客舎に寐て松嶋を憶ふ

月に寐ば魂松嶋に涼みせん

松嶋(三句)

松嶋の闇を見てゐる涼みかな  
ともし火の嶋かくれ行く涼み船  
松嶋に目のくたびれしすゝみ哉

富山紫雲閣より松嶋を見るこゝは先年風聲か駐めたま

ひし跡あり

かしこまる玉座の前のすゝみ哉

松嶋觀瀾亭に遊びて豊臣伊達兩公を憶ふ(二句)

ふはくとなき魂こゝに來て涼め

なき人を相手にほしきすゝみ哉

松嶋五大堂

松の木を叩いてまはるすゝみかな

富美觀音にて

松嶋に足ぶらさげる涼みかな

政宗公廟前にて

涼みながら君話さんか一書生

仙臺旅宿針久にて

夕涼み四角な庭をながめけり

關山越旅中

木のもとにふんどし洗ふ涼み哉

天童禰岡追分の茶屋にて

掛茶屋に風追分のすゝみ哉

下涼み牛飼牛を放ちつゝ

夜涼みや川に落ちたる人の音

蛸の子の遊女うらやむすゝみ哉

丸山に船の目利のすゝみかな

山樫の木陰に賤のすゝみ哉

傾城や客に買はれて夕涼み

髪つんで頭の風や夕涼み

川中に二人立たり夕涼み

傾城の海を見て居る夕涼み

旅人の見て通りけり涼み船

城跡をよき涼み場や宮の下

食堂を出て涼みけりこゝかしこ

根岸

妻よりは妻の多し門涼み

瀧の川

寛にも瀧と名のつく涼みかな

酒田翠松館(二句)

松の木に提灯さげて夕涼み

夕涼み山に茶屋あり松もあり

座頭納涼

風筋に頭あつむる涼み哉

打水

打水に小庭は苔の匂ひ哉  
打水やぬれていでたる竹の月  
打水や虹を投げ出す大柄杓  
打水の力ぬけたる柳哉  
水うてば犬の晝寐にとゞきけり

御祓

荻の葉にかゝる御幣や御祓川  
牛引て通りかゝるや御祓川  
爪たてゝ蟹の出てくる御祓哉  
水上はふんどし洗ふ御祓哉  
風吹て口髭そよぐ御祓哉

茅の輪

菘醫者の先がけしたる茅の輪哉

夏瘦

夏瘦を親に泣かるゝ遊女哉  
夏瘦を風に吹かるゝ法衣哉  
夏瘦を菘醫者殿に見られけり  
夏瘦を藜の杖に恥ぢにけり  
夏瘦や男の上にいぢらしき  
夏瘦の僧蘆の葉に乗て見よ  
夏瘦のつもつて老いぬかくばかり  
夏瘦は野に伏し山に寐る身哉

作並温泉

夏瘦のなほれとぞ思ふ温泉哉

鬼に瘤とらるゝ話

夏瘦の外に淋しや瘤のあと

汗

汗氷る山陰行けば風もなし

いはけなや牛引き歸る兒の汗

葱摺の石を見て

葱摺我旅衣汗くさし

仙臺愛宕山

汗ふくや仙臺は木もあるところ

汗拭

汗拭を草に干しけり葱摺

懸

くひちぎる折もありけり汗拭

更衣

風吹て飛ばんとぞ思ふ衣かへ

天竺の佛は何を衣かへ

飛石へはだしで出たり衣かへ

ぬれ髪を干す日や蟹の衣かへ

うき人にあうて恥かし衣かへ  
身受せし傾城くやし衣かへ  
何吹くと定めぬ朝や衣かへ  
衣かへ鏡か浦を見に出たり

給

うしろから猫の飛びつく給哉

老僧の錫杖みがかく給哉

松嶋の心に近き給哉

うれしさに人も留守なり給時

單衣

山風やそれぬぎすてよ單もの

留別

松嶋の風に吹かれん單もの

實方の墓にまうでて行脚の行末をいふる

帷子 浴衣 掛香 青簾

旅衣ひとへにわれを護り給へ

川風はたと帷子の一重かな

家並に娘見せたる浴衣哉

掛香や車せりあふ物まうで

御報捨の杓さし出すや青簾

青簾娘をもたぬ家もなし

松山會伊豫の名のけふにあひけり青簾

簾兒のいばりの流れけり

竹婦人

昔竹取の翁といふあり竹婦人  
きぬくの心やすさよ竹婦人  
傾城の名をつけて見ん竹婦人

蚊遣

國々や臭ひことなる蚊遣草  
鉢木の謠にむせぶ蚊遣哉  
山寺の方丈深き蚊遣哉  
大津繪の赤鬼いぶす蚊遣哉  
燕の巢にふしまどふ蚊遣哉  
傾城の手つからくへる蚊遣哉  
何思船にたく室の遊女の蚊遣哉  
傾城の姿あらはす蚊遣哉  
門番の窗にわき出る蚊遣哉  
敷多き侍町の蚊遣哉

蚊帳

窗ならぶ長屋つゞきの蚊遣哉  
晝姿に誰の回向の蚊遣哉  
關守が火鉢にくべる蚊遣哉  
蚊遣火の灰に風あり後夜の鐘  
兒啼て蚊遣の煙奥くらし  
盆栽に蚊遣の煙かゝりけり

松 宇 亭

欄干をのぼる伏家の蚊遣哉

能 因 畫 譜

蚊遣火や長柄の橋の鉦屑

片隅へ机押しやる蚊帳哉  
瘡落て足ふみのばす蚊帳哉  
はたこやに林檎くふなり蚊帳の中

蠅叩

厨あり皿も徳利も蚊帳の外  
蚊帳の風吹きまくらるゝ子供哉  
松嶋客舎  
蚊帳つれば蚊帳に吹くなり松の風

山寺の庫裏ものうしや蠅叩

寺の庫裏に酒を入れたる蠅にりあるを

山寺や酒のむ罪の蠅にり

扇

謠師に肩はる癖の扇哉  
草鞋とけて口にくはへる扇哉  
かざす顔に紅うつる扇哉  
夕涼小魚のせたる扇哉  
傾城にとりかくされし扇哉

傾城にものかゝれたる扇哉

富山より松嶋を望む(二句)

海は扇松嶋は其繪なりけり  
松嶋に扇かざしてながめけり  
座敷から扇投げやる小舟哉

團扇

蚊の多きひまな手多き團扇哉  
昔話團扇の風に薫りけり

根岸

日傘

足遅きは女なるらん日傘

新茶

京へ出る新茶の荷あり十圓子  
旅僧をよびこむ庵の新茶哉

古茶

壺の底たゞくや古き茶の名残

柏餅

傾城の故郷や思ふ柏餅

鮓

鎌倉や誰が石すゑを鮓の歴  
人間はと鮓屋の裏と答ふべし  
旅僧よ鮓魚といはずまゐられよ

青さし

青さしや清少納言有てより

夏氷

氷屋に白きが中の小提灯  
木にかける氷の旗や荷ひ茶屋

病中

夏氷はかなくたのむ命哉



仙臺愛宕山

町走る人見ゆわれは氷水

本庄古雪川

氷賣る橋の袂のともし哉

洗 飯 花もなき卯木の垣や洗ひ飯

満福寺に宿る此寺にて義經飯を食ひたる由來あり

水飯や辨慶殿の喰ひ残し

心 太 庭先の清水に白し心太

漣は馬の鼻息心太

婆の留守海月にやならん心太

心太水にもならず明けにけり

送之奥州人

五月雨

みちのくの水の味しれ心太

五月雨や小牛の角の蝸牛

五月雨や軒端を渡る峯の雲

苦の上に苔の生ひけり五月雨

一梅雨を羽黒にこもるひじり哉

玉川に布見ぬ梅雨の日數哉

並杉のくさるかと思ふ五月雨

五月雨や龜はひ上る早苗舟

夕飯のきまらぬ梅雨の日頃かな

梅雨淋し障子の外を鴉飛ぶ

入梅の中人静かなり法華堂

蝸牛の角のぶ頃や五月雨

畫 讀

さみたれやいつもの窓に琴もなし  
限りなき海のけしきや五月雨

王子

一村は杉の木の間に五月雨

傾城畫譜

五月雨や小膝にあまる文の丈  
道ふさぐ竹のたわみや五月雨  
壁をもる牛の匂ひや五月雨  
鶯飛で牛居る澤や五月雨  
五月雨の哀れを盡す夜鷹哉  
面白や牛のうたひも五月雨  
五月雨や島にならぶ杉の苗  
五月雨に瀬のかはりてや鶯の足  
五月雨やくたびれ顔の鹿の妻

風吹て暗れんとすなり五月雨  
いたつきに名のつき初る五月雨

寤疾にかゝりて

定めなき身を五月雨の照り曇り  
五月雨や箱根にかゝるちんば馬  
五月雨やともし火もるゝ藪の家  
蝸牛の喧嘩見に出ん五月雨  
五月雨やだまつて早苗とる女  
水瓶に蛙うくなり五月雨  
五月雨や朝日夕日の少しつゝ  
五月雨の崩れもやらぬほこら哉  
五月雨の茶殻もたまる日數哉  
五月雨の隅田見に出る戸口哉  
退屈や絲の小口もさみだるゝ

五月雨の足駄買ふ事忘れたり

五月 闇

夜も晝もうつらくと五月闇  
五月闇あやめもふかぬ軒端哉

五月 晴

見えそめて青雲うれし五月晴  
うれしさや小草影もつ五月晴

病起  
頃の鬚に風あり五月晴

夕顔の苗賣る聲や五月晴  
五月晴や窗をひらけば上野山  
五月晴やあつい天氣に取かゝる  
五月晴や病の窗の西日影

虎が雨

大礮の誠しぐるゝ虎が雨

夕立

夕立や屋根葺すくむ破風の陰  
夕立や沖は入日の眞帆片帆  
夕立や大路にかゝる牛車  
夕立や雀枝あたつわまのむらるイの枝  
夕立を見下す湯場の二階かな  
夕立にうたるゝ鯉のかしらかな  
見てをれば夕立わたる湖水哉

下野にて

夕立や殺生石のあたりより  
夕立に宿をねだるや藏の家

遠藤葉翁氏の家に宿りて

岩代國飯坂温泉(二句)

夕立の下に迷ふや温泉の煙  
夕立や人聲こもる温泉の煙  
夕立の虹こしらへよ千松嶋  
夕立や雀もつるゝ牛の角  
夕立のあとから來たり植木賣  
海原やかたへ夕立つ蜚小舟  
夕立を道々こぼす小村哉  
阿房宮  
夕立や紅筆溝を流れ行く  
夕立や衣ほすてふ尼の寺  
夕立や下女干物をかつきつゝ  
夕立や簀戸に押されし小傾城  
夕立や傘一本を二三人も  
ものすごくくなつて夕立つ山家哉

雲の峰

夕立のくるやあれく向うから  
旅亭  
夕立や雨戸くり出す下女の數  
作並山中  
山奇なり夕立雲の立めくる  
植木鉢の縦横に亂れたるさまをかきたるかたに  
夕立に猫といたちのさわぎ哉  
夕立や蜘蛛の子ちらす市の人  
夕立や傘張傘をたゝみあへず  
夕立の又やふりけす不二の雪  
夕立の押しよせてくる榛名哉  
向ひ地の山は夕立つけしき哉  
海へだつ上總は低し雲の峰

山を出てはしめて高し雲の峰  
風鈴の音にちりけり雲の峰  
眞黒な蝶の狂ひやけり雲の峰  
此風が吹き出しさうな雲の峰  
晝顔のつるの先なり雲の峰  
物干のうしろにわくや雲の峰  
雲の峰徐福か船は遙かなり  
雲の峰ならんで低し海のはて

青嵐

十萬家眼下に低し青嵐  
汽車見るく山を上るや青嵐  
うねくと山脈低し青嵐

風薫

白百合のかぶりふる時風かをる

水上に瀧白う見えて風かをる  
新しき垣根つゞきや風かをる

松山會

國なまり故郷千里の風かをる

燕翁奥の細道の跡を辿りて

その人の足あとふめば風かをる

叢間に矢りて戯れに

旅人のいたづらよりぞ風かをる

涼風

涼風をあびる木の間の床几哉

關山越にて

涼風やわれを山から吹下す

夏の月

牛になる僧もあるらん夏の月

夏の星

青田

木曾を出て材場の檜や夏の月  
 女二人話す戸口や夏の月  
 ぬれて行く裸馬あり夏の月  
 傾城は格子の内や夏の月  
 夏の月ほくろの多き女哉  
 草枕の我にこぼれよ夏の星  
 白鷺の力かましき青田哉  
 田舎路は鷺こきませて青田哉  
 青田あり川あり白帆五盞の六如つし  
 さゝ波や湖めぐらして青田哉  
 宙をふむ人や青田の水車  
 青田ありて又家居あり町はづれ

清水

町はづれ青田となる鍛冶屋哉  
 田から田へうれしさうなる水の音  
 夕風の見えてねぢれる青田哉  
 八郎湖のへりを取りたる青田哉  
 耳に目に谷をへたつる清水哉  
 其底に木葉年ふる清水哉  
 苔のなき石を踏場の清水哉  
 一筋は笥にはひる清水かな  
 岩つかみ片手にむすぶ清水哉  
 しんかんと物すごき山の清水哉  
 馬方の山で飯くふ清水哉  
 先へ行くつれよび戻す清水哉  
 馬柄杓に草をわけ行く清水哉

巡禮の親子出てくる清水哉  
馬上より手綱ゆるめる清水哉  
青松葉見えつゝ沈む泉哉  
静かさは砂吹きあぐる泉哉  
ひやつくや清水流るゝ右左  
清水にもあるや神の名佛の名  
千代能の桶すてられて昔清水  
世の中を清水に富めり旅乞食

關山隧道

作並

とんねるや笠にしたゝる山清水  
山の宿に手洗ひ水も清水哉  
庭先に龜の吐き出す清水哉

陶の龜の口より水の流れ出るあり

夏川

くるゝ迄子の遊びけり夏の川  
鮎はねて跡静かなり夏の川  
夏川や水の巾なる立話  
夏川や枕にひびく山の宿  
夏川にそうて面白し下り道

夏山

夏山をめぐりて遠し道普請  
作並温泉  
夏山を廊下づたひの温泉哉  
夏山の緑うつりし小窗かな

滴る山

夏野

笠一つしたゝる山の中を行く  
紫の一本見えぬ夏野哉

氷室

わけ行けば蟲のとびつく夏野哉  
ちらくと伏勢見ゆる夏野哉  
大磯  
傾城も石になりたる夏野哉

あけるよりはやひやくと氷室哉  
一山は風のひやつく氷室哉  
杉檜朝日つめたき氷室山  
氷室より氷つけ行く荷馬哉

鱒湖温泉

氷室さへあるべき山のいでゆ哉

鹿子

よべばくる程に鹿の子のなれにけり

鹿袋角

一雨にのびるや鹿のふくろ角

時鳥

時鳥ものゝ匂ひの一しきり  
時鳥晝も穂麥のそよぎかな  
時鳥鐘つき堂の白みけり  
時鳥上野でぬれし人あらん  
時鳥寒暖計の下りぎは  
時鳥二聲嵐三聲雨  
時鳥厠にこもる人はたれ  
時鳥名のれ越後は後家の數  
塚一つ松一つなりほととぎす  
竹垣や傘すぼめる時ほととぎす  
御子良子のともし火細しほととぎす  
軒らんぶ店は閉ちたりほととぎす



此頃の日記や雨とほととぎす  
宮嶋や鳥居をくゞるほととぎす  
有明の山は豊後かほととぎす  
たそがれの蒟蒻閣梅ほととぎす花  
命なり佐夜の中山ほととぎす  
大佛の臍のあたりやほととぎす

幽霊圖

四枚五枚八枚九枚郭公

三平二滿讚

床柱鼻もうたすに郭公

畫讀

うしろむく人もありけり郭公

裸美人圖

吹つけるヒメ棍の夜風やほととぎす

いそかしや星をよけく時鳥

病中

夜を眠る薬つれなし子規

吾妻山破裂

噴き出す灰の中より郭公

根岸

踏切や戸をしめられて鵬

我庵は汽車の夜嵐時鳥  
一月に二夜の闇や時鳥  
横雲をこほれて一つ時鳥  
大原や雨の中より時鳥  
君か代の不足をいへば時鳥  
時鳥なくや雨夜のほの明り  
鳥さしの竿もとゞかす時鳥

(鳴雪翁句 命なり  
春の波の呼子鳥)

惟然坊費

叩く時ひさご飛び出せ時鳥  
郭公御願かけ誰が朝参り

王子松字亭にて

雨の夜や根岸へ歸る郭公

芳原

廊には太鼓のさかりほととぎす  
傾城の耳たぶ廣しほととぎす

傾城畫譜

子規顔を格子におしあてる

辻占の引聲長し時鳥

傾城畫譜

待ちもせぬ時鳥聞き

奥州の墓はいづくに時鳥

郭公われこそ女物狂ひ

太秦や山ほととぎす古遊女

大名の生るゝ時かほととぎす

春をきのふはや鳴けほととぎす

僧ぬれたり時雨の亭の時鳥

お茶壺の上を鳴き行く時鳥

郭公何の夢見る陰陽師

郭公頻りに耳のなる日哉

郭公はてなき海へ鳴て行く

郭公一聲毎に十里つゝ

大空は四隅もなくて時鳥

時鳥江戸に旅寐の雨夜哉

ある俳人に對して

月並は何と聞くらん子規

閑古鳥

一の絲ふつゝときれて子規  
須磨寺にわが泣きをれば子規  
時鳥晝もぬれたる寺の屋根  
時鳥なくや夜明の善光寺  
竹晝讀  
月もなし時鳥もなし風の音  
晝讀  
かけ物の隅に鳴きけり時鳥

閑古鳥心細さに啼きしきる

運座の會にて閑古鳥といふ題を

閑古鳥扱も發句師のかしましき  
淋しさに鏡を見るや閑古鳥  
雲助の喧嘩のあとや閑古鳥

老鶯

尋常に鶯老いる小藪哉

根岸

老鶯若時鳥今年竹

鶯音入

鶯の音を入にけり輕業師

根岸

音を入れた鶯飛ぶやそれそこに

水雞

根岸

古澤や家居の中に水雞鳴く  
吉原や水雞にさむる人もなし

行々子

蘆の葉と共になひくや行々子  
蘆原の中に家あり行々子

葦切や水三つまたの別れきは

翡翠 川せみや柳静かに池深し

翡翠や鶯のかくれしあたりより  
川せみやながめくれたる杭木の面の先

方目鳥 鵲ありく川杭がくれたそがるゝ

浮巢 旅鳥浮巢にのつて流れけり

風吹て浮巢流るゝ瀬田の橋

蝙蝠 蝙蝠や塔のはづれに月細し

蝙蝠や剃刀つかふ手くらがり  
蝙蝠や辻講釋のくづれ時

松魚 誰人の糞になるらん初松魚

聲殿を買ひにやりけり初松魚

傾城の發句名高し初松魚

日本橋や曙の不二初松魚

初松魚羽が生えたり江戸の空

初松魚江戸の口には四季の花

鎌倉と名のつて死る松魚哉

蛇の衣 誰が墓ぞ恨をのこす蛇の衣

墓 吹殻をたべて見せるや墓

長居してふみつぶされな墓  
墓陞の娘に向ひけり

ある人に對して

蝨

世の中を悟らすもがな墓

旅籠屋に投げ出す足や蝨の跡

尼一人蝨の名所を歸り行く

日光や蝨は居れどもよい處

行脚の道中にて

世の中よ裾かゝぐれば蝨のくふ

蚤

きのくゝに蚤の飛び出す蒲團哉

下女部屋に蚤のはらつく朝日哉

旅やすし蚤の寐卷の袖たゝみ

木賃とは蚤にせゝられ雞の聲

松嶋の客舎にて

松嶋や名所の蚤のわれをくふ

蚊

蚊の聲にらんぶの暗き宿屋哉

蚊のくるや本箱のすき壁のやれ

蚊をたゝくいとがはしさよ寫し物

蚊のむれて碁打二人を喰ひけり

蚊の狂ふたそかれ時の化粧哉

蚊の死んで本のあはひに哀れなり

待つ夜半を蚊になぶられて端居哉

本堂の隅にか蚊のたなく眞蓋か蚊哉

曉やまだ血にあかぬ蚊のうなり

傾城の在所をさけば藪蚊哉

老婆助雀圖

血ふくれて疊する蚊のにくさ哉

蚊 柱

蚊柱や楠の幹にも立ち並び

神社新築

蚊柱やふとしきたてゝ宮造り

羽 蟻

天人の羽衣すつる羽蟻かな

螢

羽黒山 螢一つの闇夜哉

蓬生に螢みだるゝ夜風哉

餘り追はゞ螢困りて消やせん

鄰から追はれて來たる螢哉

露よりもさきにこぼるゝ螢哉

蘆の葉にすかりてなひく螢哉

灯 取 蟲

灯取蟲佛の灯にも焼かれけり

蟬

灯取蟲書よむ人の罪深し  
傾城に死んで見せけり灯取蟲

僧正の榎かしまし蟬の聲

飛びあてる木に落著て蟬の聲

電信の柱にあつし蟬の聲

葉柳にふられて鳴くか蟬の聲

みちのくの玉川蟬の名所哉

帆柱のさきに蟬鳴く入江哉

蟬させば竿にもつるゝ柳哉

蒲福寺

鶯の蟬にせりあふ木末哉

奥州行脚の時

風流は苦しきものぞ蟬の聲

蠅

蠅の舞ふ中に酒のむ車力哉  
蠅むれて虚空に飛ぶや馬の市  
洗うたる飯櫃に蠅あはれなり

紙

我書て紙魚くふ程になりにけり

子

子子も金魚も同じ浮世かな  
子子の蚊になる頃や何學士

水

水馬流れんとして飛び返る

若

葉

野の中に社々の若葉哉

灯のともる片側町の若葉哉  
傘たゝむ玄關深き若葉哉  
討死のあとに經よむ若葉哉  
琴の音の雨に木深き若葉哉  
人もなし上野は雨の若葉哉  
鐘もなき鐘つき堂の若葉哉  
若葉ふく雨の奥なり智恩院  
雨の日を雀の遊ぶ若葉かな  
鳥啼て石を打ちこむ若葉哉  
庫裏あけて煙のこもる若葉哉  
雫せよ若葉が下の石燈籠  
たのもしくのびる榎の若葉哉  
奥深く鈴鳴る宮の若葉哉  
鳥居より内は鳥啼く若葉哉

我を訪ふ故人心ありうら若葉  
行過て若葉になりぬ花の旅  
若葉よなあゝら花戀し人戀し

王子村

權現に古葉が中の若葉哉

豊嶋歸帆(王子八景の二)

若葉して白帆つらなる川一筋

桐葉と花簪との畫に

うつくしき名は散りはてゝ若葉哉

淺草觀音圖

鳩の餌を雀のひろふ若葉哉

上野三宜亭文學談話會

よりあうて若葉がもとの話哉

上野公園

ところく若葉にこもるともし哉  
若葉道曲りくの電氣燈

茂り  
大佛の眠たさうなる茂り哉  
のび給ひ茂り給ひぬ三輪の杉

葉櫻  
葉櫻や冷酒あふる髯奴  
葉櫻や狂女が舞の紅扇  
葉櫻や衛士の箒も木隠れて  
雨の日や葉櫻垂れて傘うつり

實櫻  
實櫻や吉野の御所に鳥の糞

夏木立  
夏木立宮ありさうな處哉



木下閣

夏木立一茶の生れ在所哉  
夏木立中に稻荷の禿ハゲ倉クラあり  
水音の葎ハはしるや夏木立  
下草にくひ入る牛や夏木立  
立つくす寫生の繪師や夏木立  
城もなし寺もこぼちぬ夏木立  
下閣や八町奥に大悲閣  
牛歸る木の下閣や村一つ  
豆腐屋の谷中こゆなり木下閣  
木下閣箇程の大寺あらんとは  
木下閣とところくの地藏哉

仙臺歸國が岡

常磐木落葉

兵隊の行列白し木下閣

瀧壺や風ふるひこむ散松葉  
ふりかゝる松の落葉や雀鳴く

夏柳

葉柳をつかまへかねし小舟哉  
むしられて見返り柳夏瘦せぬ  
ともし火の數定まらず夏柳

あらしひのあとにて

夏柳吹く程吹て静かなり

卯花

卯の花のかたへふすばる捨篝  
卯の花の雪やこほれて水の上  
卯の花や町のとまりは善光寺

橘

卯の花や牛叱りたる御隨身  
卯の花や弱法師の袖に蝨ちる

標

橘や牛飼殿に何とはん  
橘や風ふるくさき長谷の里  
橘やあたりに家もなき野中  
橘やとかくに物のふる臭き  
橘やどの枝切て三味にせん  
橘に嶋原匂ふむかし哉

合歌花

歌もそはで只大木の標哉  
夜芝居の小屋をかけたる標哉  
海棠は眠り過ぎたり合歌の花

桐

いかめしき椋の木立や合歌の花  
目がさめた頃かよ合歌の花が散る  
新道や人馬の中の桐の花

栗

薬屋根や年々くさる栗の花  
毛蟲にもならで落ちけり栗の花  
よすがらや花栗匂ふ山の宿

柿

おのが秋を鳥の落す柿の花  
咲きそめた年覺束な柿の花

百日紅

てらくと小鳥も鳴かず百日紅  
無住寺と人はいふなり百日紅

夏に籠る傾城もあり百日紅

石榴花

鬼の子のまだ頭是なし花石榴  
下闌や力がましき花石榴

五月鵬園

青き中に五月つゝじの盛り哉

青梅

青梅や傾城老いて洗ひもの  
青梅を喰うて泣きけり杜樊川

梅の實の落て黄なるあり青きあり  
根岸

青梅や黄梅やうつる軒らんぶ

夏桃

くひながら夏桃賣のいそぎけり

李實

夏桃はまだ毛の多き苦さ哉

李實

蟲はみて一枝赤き李かな

店さきに幾日を経たる李哉

桑實

桑の實や木曾にわづらふ子順禮

筍

筍や行末はたが床柱

筍や垣の横腹つんぬいて

庭先に筍ならぶ明家哉

實方中將の墓にて

君が墓筍のびて二三間

若竹

若竹やあどない顔の雀の子

竹落葉  
茨花

若竹の雨になやめる姿哉  
若竹の筆になるべき細り哉  
若竹の直まを心とのびる哉  
うつくしやまだ蚊の居らぬ今年竹  
煤はきのありともしらず今年竹  
若竹笛の昔譜によるや雀すし  
阿新といふ蛙あり今年竹  
竹の宿雀の留守の落葉哉  
牧笛の破下るや花茨  
宵闇に牛の匂ひや茨の花  
傘はひる茨の花垣奥深し

牡丹

茨さくや根岸の里の貸本屋  
茨咲くや岡凹うして牛遊ぶ  
義仲のうれしがりけり紅牡丹  
紙燭とつて女案内す小夜牡丹  
鬼神はあるまじき世の牡丹哉  
植木屋におちぶれ顔の牡丹哉  
雪洞に一輪うつる牡丹哉  
欄干に楊貴妃眠る牡丹哉  
大きさは禿の顔の牡丹哉  
傾城の瓶にしほみし牡丹哉  
金屏や一輪牡丹瓶の中  
世の中は牡丹の花に牛の角  
牡丹咲て美人の軒聞えけり

白牡丹三十六宮の夕哉

芍薬は少しすねたる若衆哉

紅花 傾城の罪をつくるや紅の花

燕子花 牛飼ふや濠はうもれて燕子花

うつくしき目高のむれや燕子花  
花一つ泥に折れこむ燕子花  
傾城が筆のすさひや燕子花

花菖蒲 折られたる菖を原の朶哉

那須野  
病中

人の來て咲くといふなり花菖蒲

藻花 藻の花に燕の行方遙かなり

淺香酒

萍花 萍のかくれうせたる嵐かな

風吹て萍動く花ながら  
萍の横幅しらぬ浮世哉

傾城讚

萍のさそはれやすき嵐哉

河骨 河骨の水を出兼る荅哉

河骨の花浮くかとぞ見えにける  
鮎汁や河骨しほむ門の脇

菱花

六角に葉なみそろへて菱の花  
かたよつて菱の花さく小池哉

蓮葉

卷葉上に高く浮葉下に廣がる蓮や此時

蓮花

白蓮の香にむせかへる小庭哉  
かたなりに花吹きこほす蓮哉  
月を湛へて錦鯉露の玉をはらひあへす蓮  
蜻蛉や蓮の苔に一つつゝ  
行水をすてる小池や蓮の花  
蓮さくや行水すてる水溜り  
ほのくや蓮の花咲く音すなり  
蓮の花さくや淋しき停車場

紫陽花

極樂や清水の中に蓮の花

遊女讀

泥水を見せぬ蓮のさかり哉  
ちりうけば吹かれつ蓮の花小舟  
蓮切て牛の背にのる童哉  
蓮持て人中行きぬ尼一人  
門前の老婆利を貪るや蓮の花

紫陽花や染物かわく藪の裏

紫陽花や源氏車の破れ窗

紫陽花やはなだにかはるきのふけふ

始めて此花庵をたたく

紫陽花やけふはをかしの色に咲く

撫子

鉄刀花筒畫讃  
けふや切らんあすや紫陽花何の色  
傾城讃

撫子や壁落ちかゝる牛の小屋  
撫子の河原も廣し大井河  
撫子の我から伏して咲にけり  
朝見れば撫子多し草枕  
花勝に撫子咲きし山家哉  
牛の子の床なつかしや野撫子  
臨奥の旅に古風の袴はきたる少女を見て  
撫子やものなつかしき昔ぶり

羽州行脚

百合花

喘ぎく撫子の上に倒れけり  
臨前國愛子村  
兒も居らず愛子の村の野撫子

結ひこんで垣より高し百合の花  
女畫讃  
うつむくは思案に似たり百合の花  
下關にたゞ山百合の白さかな

田舎旅宿

つき山に松より高し百合の花

萱草

萱草や茶屋の築山苔もなし  
那須  
萱草や青田の畦の一ならび

葵

雞の塀にのほりし葵哉  
御湯殿の窓から覗く葵哉  
簾ごし幾筋赤き葵哉  
花一つくもつ葵哉  
順々に開くでもなき葵哉  
賤が家の物干低し花葵

芥子の花

心中の沙汰は誠か芥子の花  
此夏もめでたうちぬ芥子の花  
入相や法體したる芥子坊主  
一休や芥子の坊主を見せにくる  
花芥子に親子五人の世帯哉

夕顔

夕顔やあら壁落ちて琴の腹

夕顔や三味の音による盲馬  
夕顔に女世帯の小家かな  
夕顔に旅と名のつく硯かな

田舎傾城譜

夕顔に昔の小唄あはれなり  
夕顔に飯くふ女ふたのかな

晝顔

晝顔に茶色の蝶の狂ひ哉  
山里の桑に晝顔あはれなり

釣鐘草

風吹くや釣鐘動く花の形

夏菊

人所思  
人知らずわれ夏菊を愛すなり



十薬花

十薬や何を植ゑても出来ぬ土地  
一藪をたゞ十薬の匂ひ哉

苔花

金閣や金箔はげて苔の花

鴻の臺 石くぼむ床几の跡や苔の花

目黒 其骨に苔の咲くなり小紫

瑞巖寺 古寺や門も戸ひらも苔の花

風蘭や軒にもたれし松の枝

風蘭のほのかに白し鐵燈籠

風蘭

風蘭のほのかに白し鐵燈籠

凌霄花

名も知らぬ木に凌霄のさかり哉

凌霄や一つる垂れし花かつら

飯阪妓廊 凌霄やからまる縁の小傾城

葱

細帯の女端居す釣葱

一ツ葉

一つ葉の二葉の時ぞ見まほしき

一つ葉のゆれてはなれぬ蛙哉

一つ葉の風にもまるゝけしき哉

世の中を如何に契りし一つ葉ぞ

葱菜

引けば皆かたよる池のぬなは哉

藍刈やこゝも故郷に似たる哉

藍干や一筋あけてはひり口

海羅干 鎌倉や別荘のうらにふのり干

夏草や嵯峨に美人の墓多し

惟然寐たあとのぬくみや夏の草

麥 きらくと山本くるゝ穂麥哉

麥は穂に雲雀の宿はあれにけり

一人子の凧揚げりけり麥の秋

麥秋や中國下る旅役者

刈麥の鎌倉山とうたひけり

麥刈るや裸の上に薦一つ

鳴雪翁が去年發句始めたまひし頃の跡を翁と共に尋ねける今は翁も歳をたくはへてはや俗世の外の人となりたまひけるに

風流のはや髭に出し去年の麥

露亭

雪隠の鄰は麥をつくところ

早苗

植じまひ知るや早苗の一たばね  
小山田に早苗とるなり只一人

落の葉を傘にさしたる蛙哉

うき人にくはせて見たき葉蓼哉

覆盆子

ほろくと手をこほれたるいちご哉  
旅人の岨はひあがるいちご哉  
いちごとる手もとを羣山走りけり  
ばせを塚にて

旅路なれば残るいちごを参らせん

瓜の花

蝶を追ふ蛇の力や瓜の花

瓜

何やらの花さきにけり瓜の皮

瓜二つ重たさうなる禿かな

瓜ぬすむあやしや御身誰やらん

甜瓜

狂言の手つきでぬすむ真桑哉  
旅僧のかじりついたる真桑哉

琵琶やめて真桑をむかん宵月夜

奥州旅中(二句)

鶯のなく木の下や真桑うり

真桑瓜見かけてやすむ床几哉

關山の茶店にやすんで

我はまた山を出羽の初真桑

茄子

浪人の畠にやせる茄子かな  
どれ見てもうれし小茄子大茄子

胡瓜

花のあとにはや見えそむる胡瓜哉  
東京に世渡りやすき胡瓜哉

奥羽にては胡瓜を生にてかじる風あれば

輪にもせず堅にもわらず胡瓜哉

小角豆

牛部屋のかこひと見ゆれさしげ垣

南瓜

傾城も南瓜の畑で生れけり

秋

立秋

骸骨に何やらひびく今朝の秋  
むく起や身ふるひ一つ今朝の秋  
老僧が拂子動かす今朝の秋  
湖のひつそりとして今朝の秋  
秋立つと知らずや人の水鏡  
禪寺に秋立つ壁の破れ哉  
風鈴のちろくと秋の立にけり  
今朝の秋扇のかなめ外れたり  
西吹くと水士のいふなりけさの秋

最上川(三句)